

あやかし猫の花嫁様

湊 祥 Sho Minato



アルファポリス文庫

金魚が泳ぐガラスドームのネックレス

こんな安っぽい恋愛ドラマみたいな展開、現実^{ひとごと}に存在するんだ。

私——紺茜^{こんあかね}は眼前の光景を眺めながら、他人事^{ひとごと}のように感心してしまった。

今日は、私の二十歳の誕生日だった。

数日前に年上の恋人・充^{みつる}から「授業が終わったら俺の家に来てよ。素敵なお店にエスコートするから!」と言われていたので、ルンルン気分で彼の家へ向かった。

ただし、受講予定だった講義が突然休講になったので、約束の時間より二時間早く、事前にスマートフォンからメッセージを送っておこうかと思っただけ、彼の家は大学の目と鼻の先だったので、何も連絡せずに行ってしまった。

インターホンを押すが反応がなく、留守なのかと思っただけは立ち去ろうとした。——しかし。

虫の知らせとでも言うべきか。このドアの向こうから、なんとなく不穏な気配がし

てならない。

私は、安アパートの傷だらけのドアノブをおっかなびっくり回した。鍵はかかっていなかった。だから忍び足で入った。

彼の家は狭いワンルーム。入った瞬間、それは見えた。シングルベッドの上で、妖艶な女性と体を重ねている私の恋人の姿が。

しばらくの間、無言で彼らの行いを見ていると、体勢を変えた充と目が合った。みるみるうちに青ざめていった彼は、次の瞬間、陳腐なセリフを口にした。

「茜！　ち、違うんだ！　これはっ！」

言い訳を口にする充の背中を、後ろから抱きしめる女は、私を見て勝ち誇ったように笑う。

——はあ。そんな顔をされましてもねえ。どうぞどうぞ、もういらないので持つていってくださって結構ですよ。

友達で紹介で知り合った二歳上の充。出会った時から、テンプレイタリア人のようにアピールが激しくて、流されるように恋人同士になった。

優しかったし、話も面白かったので、それなりに楽しく付き合っていた。彼に対して、燃えるような恋心を抱いていたわけではないけれど、好きだったと思う。

だけどそんな気持ちはもう微塵も残っていない。

いや、残っていないことにしよう。

浮気した男と付き合いを続けられるほど、私は器用な人間ではない。

「バイバイ」

私は満面の笑みを浮かべて、充に向かって断言する。途端に、彼が「ひっ」と喉の奥で悲鳴を上げた。きつと私の笑みに黒い影を見たのだろう。

充は、絡んでいる女の手を振り払うと、ベッドから勢いよく飛び出てきた。そして私の肩をがしっと掴むと、切なそうに顔を歪めてこう言った。

「これは一時の気の迷いっていうか……。俺には茜だけなんだ。頼む、許してくれ」

私に懇願する彼の言葉の後に、「えー！　何よそれ、聞いてない！」なんていう、耳障りな女の声が続く。

——まあ！　やっぱりその女はただの遊びで、本当に愛しているのは私なのね。

なんてこと、思うわけがないだろう、この馬鹿！

「汚い手で触らないでくれる？」

笑顔のまま、充の手を思いつき振り払う。ほんの十分前まで好きだった温かい手は、私の中で一気に不浄の物へと成り下がった。

っていうか、全裸で縫りついてこられてもねえ。写真に撮って、変なタグ付けをしてSNSにアップしたいくらいである。やらないけど。

私は充に背を向けて、つかつかと歩いて部屋を後にした。歩いている間、下種男の喚き声が聞こえた気がしたけれど、きっと空耳だと思う。

そのまま私は、大学近くのバス停で自宅方面に向かう路線バスを待つ。幸い、数分来てくれた。

私の家は繁華街から離れた山奥の集落の一軒家だ。大学までバスで五十分はかかるから不便ではあるが、賃貸ではないので家賃はかからない。

バスの一番後ろの座席に座り、私は外を眺めた。窓の風景は、賑わいを見せる繁華街から、夏らしい青々とした田んぼが多くなり、次第に周囲が木々に囲まれていく。

見飽きたその風景がいつの間にか滲んていった。気づいたら、私の目が湿っている。それを拭い、私は生まれて初めての恋人との別れに、無理やり踏ん切りをつけた。

* * *

「ただいま……」

建て付けの悪い古びた引き戸を開けながら、私は覇気のない声で言う。返事がないことはわかっているけれど、昔からの癖で言ってしまうのだ。

背の高い扉で囲まれたこの家は、母屋の他に、軽いボール遊びならできそうな大きな庭と、正体不明な物がたくさん放置されたままになっているかなり古い蔵がある。

母屋は、分厚く真つ黒な瓦屋根の載った木造平屋造りだ。正確な年数はわからないが、築五十年は軽く超えているだろう。

中には六つも畳敷きの和室があるけれど、常に使っているのはそのうちの三つで、私ひとりですむには広すぎるくらい大きな家である。

元々は母方の大叔母の持ち家で、私にとっては忘れられない思い出の家だ。物心がつくかつかないかの頃に両親を事故で亡くした私は、親戚をたらい回しにされるというありがちな経験をしている。そして、大叔母が元気だった頃、一年くらい

ここに住んでいたこともあった。

独身の大叔母は優しく心が広くて、この家はとても居心地がよかった。庭にはこの辺を縄張りしている猫が常に何匹か来ていて、よく私は猫と大叔母と家族ごっこをして遊んでいた。

大叔母が病気になるって私の面倒をみられなくなり、別の親戚の家に引き取られるこ

とになった時は、号泣したのを覚えていた。

できることなら、ずっとこの家にいたかった。しかし、当時まだ十歳だった私に、自分の身の振り方を決める権利などあるはずもなかった。

その後、紆余曲折の末なんとか成人を迎えた私だったが、この家で過ごした温かな日々を、どうしても忘れることができなかった。

そして、大叔母亡き後、ずっと空き家になっていたこの家に、大学進学と同時に住まわせてもらうことになったのだ。

家に入った私は、荷物を置くなり、真っ先に脱衣所へと向かった。浮気男に触れられた左肩を、一刻も早く洗い流したかったからだ。

バランス釜のつまみを、カチカチと音を鳴らしながら回して湯沸かしをする。この昭和の遺物を、私と同世代の人はあまり知らないようだ。

バランス釜とは、バランス型風呂釜の通称で簡単に言えば、ガスを使った給湯器のことだ。シャワーの水圧が弱く、すぐにお湯も冷めてしまうけれど、そこまで不便は感じない。

お湯が沸くまでの間、とりあえずシャワーで体を洗い流す。私はあの男に触れられた左肩を、石鹸で念入りに洗った。まるでお清めでもするような気持ちで。

気のすむまで洗って満足した時、ふと鏡に映った右肩の痣が目に入った。

物心ついた時から右肩にある、二センチ四方くらいの変な模様の痣だ。どことなく猫の肉球のような形に見えなくもない。

親戚の話によると、生まれた時に痣はなかったそうだ。もしかしたら、幼い時に怪我でもしたのかもしれない。

入浴後、すぐに寝てしまおうかと思っただけ、この心の乱れようでは、入眠までに時間がかかる気がした。

そこで私は、ある部屋へ向かった。

その部屋に入った瞬間、鼻を刺すような樹脂の臭いがした。一般的にはあまりいい臭いではないけど、私にとっては慣れ親しんだ落ちつく臭いだった。

六畳ほどの和室には、大叔母が放置していた桐箆笥や、私が最近買った安物のキャスターなどが所狭しと並んでいる。部屋の奥にある机の上には、工具やUVライトが出っぱなしになっていた。

「さて……今日は何をやるのかな」

机の引き出しを開けて、中に入っているパールやビーズ、ホログラムなどのキラキラしたパーツを眺める。ここは、アクセサリーなどを作るための作業部屋なのだ。

私はアクセサリー作りを趣味としていた。それは、子供の頃にリリアンやビーズ細工を教えてくれた大叔母の影響だった。

UV光でレジンを固めたり、樹脂粘土やプラバンを使ったアクセサリー作りは、時間の経つのも忘れて没頭してしまふ。

しかも、最近ではただの趣味ではなくなってきた。

というのも、大学に入学したての頃、できの良かったアクセサリーを試しにネット通販サイトで販売してみたところ、あつという間に完売してしまった。

それ以来、アクセサリーによる稼ぎが、私の食費や光熱費となっている。最近では顧客も増えてきていて、他にアルバイトをしなくてもいいくらいの利益が出ていた。

——今日はひたすらアクセサリーを作り続けよう。そうすれば、あの忌々しい男のことなんて、どっかに消え失せてくれるだろう。

それから数時間、私は集中してアクセサリーを作り続けた。透明なレジンの中にパールやドライフラワーを封じ込めたヘアゴムや、樹脂粘土で作ったマカロンモチーフにした子供用のペンダント、ビーズを繋げたシンプルなおピアスなど、販売用のアクセサリーが次々とでき上がっていく。

作業が一段落し、満足感を味わっていた時だった。

——ん？

外で何か物音がしたような気がした。

来客だろうか？ この集落に住む人の大半は、何世代も前からここに定住している顔見知りだ。みんな親戚のような感覚でいるからか、平気で他人の家に上がり込む。

大叔母の親戚である私のことも、そう思ってくれているのは嬉しいけれど、田舎ならではの風習にはやっぱりちよつと困ってしまふ。

まあ、ご近所さんはみんな気のいい人たちだし、円滑な近所付き合いのためには、やめてほしいなんて言えないのだけど。

私は障子を開けて、縁側へ出る。案の定、庭に人影があった。すでに午後九時を回っていたため、暗くて誰かは判別できない。

だけど、こんな山奥に泥棒なんてめったに出ない。やっぱり近所の誰かだろう。回覧板でも届けに来たのだろうか、と私は小さく嘆息する。

「あの、何かご用ですか？」

私はその人影に向かって、声をかけた。するとその影がゆつくりと振り返る。作業部屋から漏れる光が、その人物の顔を照らし出した。

——その瞬間、私は息を呑んだ。

一見、鋭く見えそうな切れ長の瞳には、穏やかな光が浮かんでいる。驚くほど整っている色白の顔は、女性と見まがうほど美麗だ。しかし、百八十センチはありそうな長身と平坦な胸、灰色のシンプルな男物の着流しを着ていることで、彼が男性であるとわかる。

二十五歳前後に見える彼は、カラーコンタクトでも入れているのか、美しい新緑の瞳をしていた。スツと通った鼻筋に、形のいい薄い唇。黒い短髪はサイドの長さが左右で違っている。よく見ると、橙色のメッシュユがところどころに入っていた。

首には黒い首輪のようなチョーカーをしている。

——え？ どういうこと？　なんでこんな神秘的な超絶和風イケメンが、ウチの庭にいるわけ？

「あ、あの。ご近所の方……ですか？」

想定外の来訪者に、私は少しだけ警戒しながら尋ねる。こんな下田舎には不釣り合いなイケメンではあるが、最終バスもとづくに通過している時間にここにいるということは、この辺の人で間違いないはず。

でも、今まで一度として見たことがないことを考えると、帰省か何かで集落を訪れた人だろうか。それとも、引越してきた人とか？

相手についていろいろ考える私だったが、彼は艶っぽい唇を開いて、爽やかなイケボで言った。

「近所……というよりは、親族かな？　君の」

素敵な美声に一瞬心地よくなったが、言われた言葉の意味がわからず、首を傾げてしまう。

「……………はあ？」

親族……って？　この人が？

記憶を必死に探って、会ったことのある親戚を思い出そうとする。

だけど、親戚同士の集まりで、このイケメンの顔を見たことは一度もなかった。

もしかしたら、私の知らない遠縁の親戚なのかもしれない。さすがにすべての親族を把握しているわけではないし。

「そうなんですか。……私とは初対面のようですね」

こんなイケメンなら、一度でも顔を合わせていたら絶対に記憶に残っているはずだ。

「初対面？　まさか。何を言ってるんだい？　僕はずっとこの日を待っていたんだよ」

まるで恋人に愛を囁くような色っぽい目つきをして、穏やかに彼が言う。かっこ

いいなあこの人と思いなながらも、やはり言っていることがわからない。思わず私は肩間に皺を寄せた。

——なんか、変わった人だな。

こんな山奥の家にピンポイントで訪ねてきたということは、大叔母と繋がりがあ
る可能性が高い。だけど私には、本当に全く彼に心当たりがなかった。

不思議と怖そうな感じはないけれど、掴みどころがなくてちよつと変な印象を受け
る。夜も遅いし、一度お帰りいただけられないだろうか。

「あの、たぶん人違いかと思えますよ」

私は努めて優しくそう言った。すると彼は困ったように微笑んだ。

「約束を忘れてしまったのかい？ 今日酉の二十歳の誕生日だろう。ようやく昔の
契りを果たす時が来たというのに」

「えっ!？」

その言葉に私は虚を突かれた。

何故私の名前と誕生日と、さらには年齢まで知っているのだろうか。

どうやら人違いではないようだ。しかし、やっぱり彼に関する記憶が一切ない。幼
い頃に会ったきりで、私が忘れてしまっているだけなのか？

「申し訳ないんですけど、私はあなたのことを全く覚えていなくて。あと、契りって
なんのことですか？」

本当に親戚なのかもしれないけれど、彼の目的が一向にわからないので、恐る恐る
尋ねる。

すると彼は「ふっ」と鼻で小さく笑う。「仕方ないなあ、こやつめ」とでも言った
げな、どこか面白がっているような微笑み。

「昔、家族になろうと約束しただろう？ 今日、酉が二十歳を迎えたことによつて、
やつと僕たちは結婚できるんだよ」

「けっ……!？」

予想を大きく上回る単語が出てきて、思わず言葉を詰まらせてしまう。

なんでこのイケメンから、突然、契りだの結婚だの訳のわからないことを言われて
いるのか、皆目見当もつかない。親族かどうかも怪しい気がしてきた。

ただ、確かなことがひとつだけある。

——こいつ、絶対やばい奴だ！

そうでなければ、いきなり結婚なんてワードが飛び出してくるはずがない。私とど
こで出会い何を気に入つたのかは知らないが、新車のストーカーという可能性もある。

ストーリーカーなら、年齢や名前くらい調べているだろうし。

「婚礼の準備をしないとなあ。化け猫たちが大勢祝ってくれるよ」

ますます訳のわからないことを言い出した男から、私は一目散に逃げ出した。作業部屋に戻り、急いでガラス戸を施錠し、障子をぴしゃりと閉める。

やばいやばい。本当にあの人、やばい。

警察を呼ぼうか!? いや、でも実際に被害が出ないうちは動いてくれないって聞いたことがある。それに、パトカーがサイレンを鳴らして来た日には、近所中の噂になるだろう。せつかくのんびり暮らしているのに、居づらくするのは勘弁だなあ……などと、作業部屋の中で頭を抱えていると。

「夫に対してひどい仕打ちだね」

「うわあ!?!」

いつの間にか、作業部屋に着流し姿のイケメンがいた。彼は、先ほど作成したアクセサリーや桐箆きりだんすを興味深そうに眺めている。きつちり鍵は締めたはずなのに、一体どこから入ってきたというのか。

「ちよっ……! なんなのあんた! 不法侵入で訴えるよ!?!」

彼の物腰が柔らかなためか、不思議と恐怖感はなかった。しかし「一体全体お前は

何者なんだ」という思いが強くて、口調が乱暴になってしまう。

「夫婦だから不法侵入も何もないと思うけど?」

「だ、だからっ! その意味がわからないからっ! 私は独身はたち二十歳の女子大生ですっ! 誰かと結婚した記憶はとんとございませーん!」

「ああ、やつぱり忘れてるのか。でも大丈夫。僕はちゃんと覚えているから」

私が必死に訴えても、ニコニコ笑いながらりと流されてしまう。まさに暖簾のれんに腕押し、糠ぬかに釘。

「あの! 私今、忙しいんで! その話はまた今度!」

よって、別の作戦に出ることにした。真っ向から彼の言っていることを否定しても聞いてくれないことがわかったので、とにかく出て行ってもらうように仕向ける。

——すると。

「なんだ、そうなのかい? 女子大生とやらも大変だね。それではまた後でね、茜」

柔らかな笑みを浮かべてそう言うと、彼は私に背を向けてあっさり作業部屋から出て行った。

よくわからないけど、意外に簡単に納得してくれてよかった……。私はひとり残された部屋で、安堵のあまりその場へたり込む。

途端に、どっと疲れが湧いてきた。

今日は、恋人の浮気現場に遭遇して別れを決意した上、変な男に不法侵入されるというダブルコンボをお見舞いされたのだ。疲労困憊するはずである。

そう思ったなら、急に眠気が襲ってきた。寝室に行く気力すらなかった私は、そのまま作業部屋の畳の上で眠ってしまったのだ。

* * *

懐かしくて、切ないけれど、ちよつと優しい。そんな遠い記憶を夢に見た。

これはいつのことだっただろう？

「みーくん……みーくん……」

私は泣きながら大叔母さんの家の縁側に座っていた。三毛猫のみーくんが「にやあ……」と寂しげに鳴いて、私の膝へ乗ってきた。

みーくんは、その時の私の親友だった。ほとんどいつも一緒にいたと思う。

お父さんとお母さんを亡くした私が、大叔母さんの家で暮らすようになって一年が経った。

それまでは従兄弟の家や、独身の叔母さんの家で世話になっていた私。みんな最初は優しくかった。しかし、次第に従兄弟は私を邪魔者扱いするようになったし、大人たちは私のいないところで「あの子、暗くてかわいくないわねえ」「いつまで家で面倒をみなきやいないんだ」なんて言っているのを知っていた。

だから私は、どこにいても心から馴染むことができなかったんだ。

だけど大叔母さんだけは違った。最初に「好きなだけここにいていいよ」と言ってくれた。それでも今までの経験から、なかなか心を開けない私に「一緒に編み物しようか」とか「リアンやってみる？」と、いろいろなこと誘ってくれた。

少しふつくとして小柄だった大叔母さんは、その小さな体から常に温かい雰囲気醸し出していった。両親の死や他の親戚からの扱いによって、自暴自棄になっていた私の心を優しく溶かしてくれるような、そんな雰囲気。

若い頃は大層美しかったのだろうと想像できる整った顔には、幾重にも皺が刻まれていた。その皺がより深くなる大叔母さんの笑顔に、嘘や偽りが無いことを私は子供ながらに感じ取っていた。

彼女が心から私を受け入れてくれることがわかって、大叔母さんが大好きになり、彼女の前では素直な子供になれたのだ。

大叔母さんの家の広い庭には、いつも何匹かの猫がいた。近所をうろついている猫たちは、優しく大らかな大叔母さんによく懐いているようだった。

育った環境からか学校でもなかなか友達ができなかった私は、その猫たちと大叔母さんが遊び相手だった。

お父さんとお母さんを亡くしてから初めて、心から安らぎを覚えたのがここでの暮らしだった。「大人になるまでここにいていいんだからね」と言う大叔母さんの言葉に、私は心の底から安心していったのだ。

——それなのに。

大叔母さんは重い病気となり、入院することになってしまった。

私はひとりになったってここにいたかったけれど、十歳の私にそんなことをさせるわけにはいかなかったらしい。

大人たちが私の今後を話し合っている時に、何度も「ここに残らせてください」ってお願いしたけれど、「わがまま言うんじゃない！」と怒られてしまった。

私はまた、従兄弟の家で厄介になることが決まった。従兄弟は面倒くさそうに私を見て、叔父さんと叔母さんは作り笑いを浮かべて「またよろしくね」と言った。

行きたくなかった。この人たちは私を邪魔者だと思っている。それなのにどうして

私を預かったりするのだろう。

大叔母さんは私に掃除だって料理だって、洗濯だって教えてくれた。だから、ひとりだってこの家で暮らしていけるのに。

「みーくん、離れたくないよ……」

私の膝に乗ってゴロゴロと喉を鳴らすみーくんには、私は泣きながらそう言った。

みーくんも一緒に連れていっちゃダメかな。そう思ったけれど、ただでさえ邪魔者と思われている私が、そんなことを言えるはずなんてなかった。

私の家族は、大叔母さんとみーくんだけなのに、どうして離れなければならないのだろう。

「にゃーん」

拭うたびに溢れてくる涙を、みーくんがペロリと舐めた。猫の舌はざらざらとしていられるけれど、とても温かい。

みーくんが私を心配しているのがわかる。前々から思っていたけれど、みーくんは不思議と私の言っていることがわかっているみたいだった。

みーくんや他の猫、大叔母さんと一緒に、おままごとをした時もそうだった。

大叔母さんがおばあちゃんて、私がお母さん。そして、みーくんがお父さんて、他

の猫たちは娘だったり息子だったりおじいちゃんだったり、設定はその都度違っていた。

でも私とみーくんはいつも夫婦だった。他の猫たちと違って、みーくんだけが私の言葉にちゃんと返事をしてくれるし、お願いをきいてくれるから。

お願いといっても、隣に座つてとか、お箸はしに使う木の棒を取ってきてとかだけ。でも猫なのに、私の言葉をわかってくれるのは、きつと本当の家族だからなんだって思っていた。

——いやだ。また家族がいなくなってしまうのは。

「みーくん、これあげる」

私はポケットの中から、この前大叔母さんと作ったビーズの指輪を出した。みーくんの毛の色に合わせた、オレンジっぽい茶色と黒、白の丸ビーズを紐ひもで繋げた色鮮やかな指輪だ。

「にゃーん？」

みーくんはそれに鼻を近づけて、くんくんと匂いを嗅いだ。そしてそれに頬をこすりつけてくる。どうやら、気に入ってくれたらしい。

私はみーくんがしている黒い首輪の金具に、その指輪を付けた。

「これは家族あやかしの証あかしです。これがある限り、私とみーくんはずーとずっと、一生涯ぬまで家族です」

ありったけの願いを込めて言う。みーくんは目を細めて「にゃーん」と長い声を上げた。まるで返事をしてきているような鳴き声に、私は顔を綻はらばせた。

——みーくんと私は、離れていても家族だ。

頑張ろう。私にはみーくんがいるんだ。お父さんもお母さんもうなくなつて、大叔母さんと一緒に暮らせなくなつたつて、私にはずつとみーくんという家族がいる。

次の日、叔父さんが迎えに来た。みーくんは家の敷地から出ていく私を、中庭の真ん中からずつと見つめていた。

——僕はずつとここにいるよ。

みーくんのガラス球のような緑色の瞳が、確かに私にそう言っていた。けれど、その時を最後に、私はみーくんと再会することはなかった。

* * *

目が覚めたら、見慣れない天井が目に入った。

覚束ない頭で、眠る前の記憶を思い出す。あまりにいろいろなことがありすぎて、寝室に行く気力もなく作業部屋でそのまま眠ってしまったんだっけ。

——それにしても、懐かしい夢だったな。

親友だった三毛猫のみーくん。

そういえば三毛猫の雄って、めったに生まれない希少種だと聞いたことがある。まるで私の言葉がわかっているような素振りをしていて、頭がいいなあなんて思っていたけれど、やっぱり特別な猫だったんだな。

大学入学と同時にこの家に戻ってきた時、庭にみーくんの姿はなかった。たくさんいた他の猫たちも。

近所の人に尋ねたら、最近では猫が外をうろついているのを嫌う人が増えたため、今は完全室内飼いにするようになったと言っていた。

時代の流れだ。

みーくんも、近所のどこかのお家の中にいるかもしれない。あれから十年くらい経っているけれど、まだ元気でいるといいな。

そう、私がみーくんとのお別れを懐かしんでいる時だった。

「にゃーん」

窓の外から聞こえてきたのは、猫の鳴き声。

思い出の中のみーくんと同じ声だった気がする。

まさか、と思つて私は障子とガラス戸を開けた。

——そこにいたのは。

「みー……くん!？」

白地に黒と茶色がまだらに浮かんでいる三毛猫模様。グリーンのまん丸で大きな瞳。猫の中ではかなりの美形と思われるその容姿は、先ほど見た夢の中の、私の家族と完全に一致する。

間違いない。見間違えるはずがない。

だつて、大好きだったから。大好きな家族なのだから。

庭にちよこんと座つたその猫は、真正正銘、私の家族のみーくんだった。

しかし、あれから十年以上経っている。

あの当時、まだ若い猫だったみーくんは、今は少なく見積もっても十一歳は超えているはずだ。確か猫の十歳は人間でいう六十歳くらいだつて、どこかで聞いたことがある。

猫は人間ほど老化が顕著に表れないそうだけど、十年経つたのに昔と全く変わらず

若々しいなんてことが、あり得るのだろうか。
 どうして昔と変わらない姿なのだろう？ 疑問に思う私の前で、みーくんは身軽な動作で私の立つ縁側の上に飛び乗る。

——そして。

「なんだ、僕のことをちゃんと覚えているじゃないか」

猫のみーくんがそう言った——そう言ったのだ。確かに、人間の言葉で。若い男性のような声音で。

「……!?!」

驚きのあまり言葉を失い、足元にすり寄るみーくんを凝視する私。みーくんはまるで人間がするように目を細めて笑った。そして、次の瞬間——ボンッ、という軽い爆発音と共に、みーくんが白い煙に包まれた。

突然のことに、私は反射的に目を閉じてしまう。

「昨夜の反応は照れ隠しだったのかな？」

また若い男の声が聞こえてきたので、私は^{まふた}瞼を開いた。そして、視界に飛びこんできた人物を目にして死ぬほど^{きょうが}驚愕する。

「あんた……！ 昨日の夜の!?!」

そう、突如眼前に現れたのは、昨日不法侵入してきた和風イケメンだったのである。「あんた、じゃないよ。みーくんさ。まあ、本当の名は^{ときわ}常盤っていうんだけどね」
 「とき……わ……?」

あまりにも理解不能なことが目の前で起こったためか、脳内^ががクエスチョンマークで埋め尽くされる。

えーと。さっきまでここにいたのは、私が昔よく一緒に遊んだ三毛猫のみーくん。うん、昔と少しも変わらない姿だったのは不思議だが、ここまではかろうじてOKだ。問題はな^い。

だがその後、みーくんがいきなり人間の言葉を話し、白煙と共に昨晚のやばい和風イケメンに変身した。

いや、もう意味がわからない。何もOKじゃない。問題しかない。

「私、まだ夢でも見てるのかな」

呆然としながら、^{だいたい}橙色のメツシユが入った黒髪の男性を眺める。

そんな私の眩きに、彼は首を横に振った。

「もう夢は終わったよ。夢の中で昔の僕と会ってくれたよね。あの頃は楽しかったよね」

「え……!! あんた、猫から人間に変身するだけじゃなくて、人の夢まで見れるの!？」

彼——みーくんから変身した常盤と名乗る男は、得意げに微笑む。

「そりゃあ、化け猫の総大将だもん。人間の夢を覗くくらいわけのないことさ」

「化け猫、の総大将……」

普段の生活で縁がないような単語ばかり常盤の口から出てきて、なんだか頭痛がしてきた。思わず私は頭を押さえて俯うつむく。

「きつと疲れてるんだ……これが夢じゃないなら幻覚と幻聴……」

「だからー、そういうんじゃないってば。僕は真正銘ここに存在するあやかしだよ。ちゃんと現実を受け止めてよ、茜」

「ちよつとキヤパオーバーですね……」

もう耐えきれなくなり、私は縁側に腰を下ろす。そして膝の上に肘をつけて、手のひらの上に額ひたいを乗せた。

「それもそっか。茜は普通の人間だもんね。あやかしのことなんて全く知らないから、驚いても仕方ないか。じゃあ、僕がゆつくり説明してあげるよ」

「はあ……」

これ以上、私の常識から外れたことを言われたら頭がパンクしてしまうんじゃないかと心配になった。しかし、反論する元氣も逃げる氣力もない私は、否応いやおうなく常盤の話話を聞くことになってしまった。

要約すると、常盤の話はこんな内容だった。

十年ほど前、猫好きな大叔母の家の庭は、化け猫の常盤にとって非常に居心地がよく、毎日のように遊びに来ていたそうだ。

そこで常盤に懐なついたのが（私は彼の方が懐なついてきたと思うのだけど）、当時ここで暮らしていた十歳の私だったという。

そして私がここを離れる前日、互いに家族になる誓いを交わした。私が「みーくんと私は一生死ぬまで家族です」と宣言したあれのことだ。

それが、化け猫界の決まりにおいて、正しい婚姻の誓約とみなされたのだとか。だが、私がまだ結婚可能な年齢に達していなかったため、その時は仮の婚姻として成立しづらい。

だが昨日、二十歳はたちを迎えた私は、あやかしの法令で結婚可能な年齢となった。そのため、満を持して常盤が私を迎えに来たのだという。

「僕もちよつど最近、化け猫の総大将になることができただよ。茜を迎えるに相応ふさわ

しい男になっただろう?」

ふふんと、微笑みながら常盤が言う。

化け猫の総大将って、すごく偉い奴っぽくない? もしかしてみーくん……じゃないか。常盤ってすごいあやかしのかも……って、何、納得しちゃうようになってるんだ私は!

「いやいやいや! 確かに、私はみーくんと家族になろうって約束したけれど、それは家族であって夫婦じゃないから!」

「男女が家族になる、という約束を交わしたとしたら、それは夫婦になるという意味ではないかい?」

「だ、男女って……あの時の私に、そんなつもりあるわけじゃない! だいたい、みーくんのこととはただの猫だと思ってたもの!」

「え? でも、よく夫婦生活を予行演習してたじゃないか。僕はいつも茜の夫役だっただろう」

「あれは、ただのおままごとでしょ!」

確かにみーくんのこととは大切に思っていたし、ずっと一緒にいたいと願ったのも鮮明に覚えている。

でも夫役を任せていたのは、猫の中で一番賢かったのがみーくん、遊んでいて楽しかったからだ。他意はない。

家族に対する間違った認識とおままごとの配役で、結婚を決められては困る。

「と、とにかく! 私はそういうつもりじゃなかったの! それに証拠もない口約束なんて、無効にしてください!」

「それは無理だよ。第一、証拠ならあるしね」

「え!」

常盤はその細い首に巻かれている、黒い革のチョーカーを指で触って回し始めた。すると、今までは背中側に回っていたらしいそれが現れる。

「化け猫の婚礼の儀式でもっとも大切なのはね、花嫁が自らの手で花婿に誓いの装身具を装着すること。茜はあの日、僕に確かにその儀式をしたんだよ」

あの日、家族の証としてみーくんの首輪にくくりつけた、ちゃんな手作りのビーズの指輪。常盤はそれを、あの日のまま首輪の留め具に引っかけていた。

「そ、そんなこと知らなかったんですけど!」

私は叫ぶように言う。

花嫁が花婿に誓いの装身具をつける、だって!? そんな化け猫の儀式、人間の私が

知るわけないじゃない!

「知らなかったにもかかわらず、結婚の契りとなる行動をしまっうなんて……。もはやこれは運命だね」

「違います!」

しみじみと言う常盤に、私は早口で強く否定する。この人、なんだかすごくマイペースだし人の意見を聞こうとしない。話しているとても疲れる。

「それに、茜にもちゃんと婚礼の刻印があるじゃないか」

「え!」

「その右肩にある痣だよ。それは化け猫と人間が結婚した時のみ、花嫁の体のどこかに現れる婚礼の刻印さ」

「婚礼の刻印!? この痣ってそうだったのっ?」

いつもは服で隠れているけれど、自宅ではよくデコルテが開いた楽な服を着ていたから、今日は痣が露わになっていたのだった。

生まれた時にはなかったこの痣の成り立ちが、まさかこんな形で発覚するなんて。つまり、今までの常盤の話をまとめると。

私と常盤は、十年前のあの日、図らずも結婚の誓いをしてしまった。そして私があ

やかしの世界の法令で結婚できる年齢となり、誓約に従い彼が迎えに来たということらしい。

常盤の主張が、意味不明、支離滅裂というわけではないことは、とりあえず理解した。頭のおかしい人ではないということも。

ただ、あやかしという、一日前の私にとっては信じられない存在ではあるけれど。

—— だけど、だからって。

「いや、無理だから。そんなの。結婚とか本当に。いきなりだし。本気で無理」

頭の中で状況を整理して幾分か冷静になった私だったが、もちろんそんな話、受け入れられるわけがない。私は常盤を見ながら、はつきりと言う。

「そっか。誓約を忘れていた茜にとっては、唐突な話だったかもしれないな。ごめんよ、急に押しかける形になってしまっうて」

「え……?」

今まで私の言い分をのらりくらりとかわしていた常盤が、急にしおらしい態度になったので、拍子抜けしてしまう。

な、なんだ。意外と話を通じるんじゃない? よし、それじゃあこの結婚話はなかったことにしてもらって、さっさとお帰りいただこう。

と、思ったのは束の間だった。

「それなら、今日からここで一緒に暮らすことにしよう」

にこりと美しい笑みを浮かべて、常盤が言った。

「は……………」

なんで、どうしてそうなるのか。全く理解できず、哑然としてしまった私は、思わず間の抜けた声を出す。

「化け猫の総大将は、妻とひとつ屋根の下で暮らさないと、いろいろと厄介でね。最初はぎこちなくても、一緒に暮らしていくうちに夫婦らしくなっていくんじゃないかな？ ね、そうしようよ、茜」

名案だ、と言わんばかりに弾んだ声で常盤が言った。彼の超絶理論に私はしばしの間言葉を失い、まるで別の生き物（実際そうだけど）を見ているような気分になる。

「なななな、何言ってるのっ！ 『どうしようよ』じゃ、な……」

なんとか気を取り直し、常盤の提案を全力で拒絶しようとした……その時。

玄関でインターホンの鳴る音が聞こえた。今はまだ朝の七時頃。こんな早朝の来客に思うあてはなく、私は眉をひそめた。

しかし、このおかしな状況からの逃走を図るべく、私は常盤に何も言わず、バタバタと走って玄関に向かう。

「はい！ どちら様ですか？」

そう言いながら、玄関の引き戸を開ける。この古い家にモニター付きのインターホンなんてあるはずもないから、来客はこうして直接対面しなければならない。

防犯上あまりよろしくないが、こんな下田舎いなかに危険人物が出没することなんてまずないから、特に問題はない。いや……なかった。昨日までは。

だけど、常盤のような珍客が、この短期間に再び現れるわけがない。大方、朝の早いご近所さんが回覧板でも回しに来たのだろう。

いつものように戸を開けた私だったが、玄関先に立っていた意外な人物に虚を突かれた。

「充……………」

呆然としながら彼の名を呼ぶ。

彼——充は、私の恋人…………いや、元恋人だった男だ。昨日のあの出来事より前は。

こんな最低な浮気男のことは、きれいさっぱり忘れようと思っていたが、さすがにいきなり眼前に現れたら、戸惑ってしまう。

「茜…………昨日は、本当にごめん。本当に…………あれは、その、一時いちじの気の迷いだったん

だよ」

「……………」

彼は目の下に色濃く隈を刻み、血色の悪い顔で言った。昨日の件を、そんなに後悔しているのだろうか。なんだか少し、様子がおかしいように見える。

「本当に申し訳なかったと思ってるよ。あの女に家にいきなり来られて追られて……。」

「ごめん、俺には茜だけなんだ！ 茜しかないんだ！」

血走った目でそう訴える彼からは、必死そうな印象を受けた。

——まあっ！ そんなにも私のことを愛しているのね。やつぱり、私の方がいいのね。こんなにも愛されているのなら、浮気のひとつやふたつくらい、許してあげないとね。

「……そんなお花畑みたいなこと、誰が考えるかつーの。なめてんのか……」

俯いた私は、殺意を込めつつそう言った。頭上からは「茜……？」という、私の態度を不審に思ったらしい充の声が聞こえてくる。

私は顔を上げて、充をキッと睨みつけた。彼はその迫力に怯んだようで、一歩後ずさった。

「そういうの、もういいから！ 私とあんたは終わったの！ あの色っぽい彼女とよ

ろしくやってなよっ。私はあんたのことなんて、大大大大っ嫌いっ！」

「茜!？」

「二度と私に顔を見せないで！」

そう言い捨てて、私は玄関の戸を勢いよく閉めた。

——しかし。

「茜……待てよ」

「……………」

戸は完全には閉められなかった。隙間に充が足を挟み込んだことによつて。

戸を閉める手に力を込めたけれど、彼は挟んだ足をうまく使つて家の中に体をねじ込んできた。そして、私の手首を掴んで、にやあと邪悪な笑みを浮かべる。

「俺から離れるなんて許さねえよ、茜」

「えっ、ちょ……離してよっ！」

手に力を込めて彼の拘束から逃れようとするも、相当強い力で握られているためか、びくともしなかった。

——なんだろう、様子がおかしい。

充はどちらかというと言食系男子である。いつも「茜の好きな方にしていいよ」と

か「茜が決めていいよ」とか言つて、あまり主張してくるタイプではなかった。だから昨日の、あの女性に迫られて流されたというのも、本当だろう。

そんな充が、こんな強引なことをしてくるなんて、信じられなかった。そうするほど私のことを手放したくない……という可能性もなくはないけど、この行動はあまりにも普段の彼とかけ離れている。

まるで、別人になってしまったかのような、何かよくないものに取り憑かれてしまったかのような、そんな印象を受けた。

「……絶対に逃がさないからな」

至近距離からギラギラした目で見つめられ、私は彼に対して初めて恐怖を抱いた。相変わらず手首はがっしりと掴まれていて、身動きが取れない上に、震えて声も出ない。

——何これ。誰か。誰か、助けてっ！

無意識に、私が助けを求めた時だった。

「人の妻をたぶらかそうとするとは。大層無礼な男だね」

聞かえてきたのは、のほほんとした常盤の声だった。家の奥からやってきた常盤は、私と充の傍らに腕組みをしながら立つ。

「なんだ、お前は」

突然現れた、充にとっては正体不明な男。充はドスの利いた声を上げて常盤を睨む。「それはこっちのセリフだねえ。茜に触らないでくれるかな」

相変わらず間延びした声で言うのと、常盤は私から充の手をあつさり振り払ってくれた。そんなに力を入れた様子はなかったというのに。

そして常盤は私の肩を抱いて、自分の方へと引き寄せる。温かな常盤の体温が伝わってきて、少し前まで恐怖に怯えていた私は、不覚にも安堵を覚えてしまった。

しかし私たちのその様子に、充は激高したようだった。

「妻!? おい茜! どういうことだ! お前も浮気してたのかよ!」

憤怒に駆られた面持ちで叫ぶ充。凄まじいその形相に、やはり様子がおかしいと改めて思った。

「浮気? 違うな。どちらかというと、本命は僕で君に浮気してたつてところか。僕と茜は結婚の契りを交わしているからね。……茜、君は僕とのことを忘れていたみたいだから、彼との浮気については特別許してあげるよ」

「何訳のわからないことを……! 殺すぞ!」

常盤の泰然とした態度に、充は我を失ってしまったようだった。地を蹴り、常盤に

飛び掛かってくる。

危ない。やられる！

反射的に目を閉じた直後、大きな衝撃音が響いた。一瞬、常盤が充に殴られてしまったのかと思っただけで、常盤に肩を抱かれている私は何も衝撃を感じていない。それに、音はもう少し離れたところから聞こえた。

恐る恐る顔を覗くと――

「え……どういふこと!?!」

目を閉じる前まで眼前にいたはずの充が、そこにはなかった。一体彼はどこに行っただろうと辺りを見回して、私は驚愕する。

充は玄関と門を通り越して、家の前の歩道に備え付けられたガードレールに、背中をもたれかけていた。つまり私が目を閉じた一瞬の間に、十メートルくらい移動したことになる。

「あまり人間相手に化け猫の力は使いたくないんだがね。緊急事態だったから、やむを得なかった」

驚く私の頭上で、のんびりと常盤が言う。

え、つてことは、常盤が化け猫の力で、充をあそこまで吹っ飛ばしたっていうこ

と!?

「う……」

充は呻き声を上げながら、なんとか立ち上がる。かなりの衝撃だったのだろう、背中を丸めて顔を歪めている様は、とても痛々しい。

「まだ向かってくるかい？ 次は容赦しないけれど」

そんな充に追い打ちをかけるように常盤が言う。口調こそ変わらず穏やかだったが、有無を言わせない強さを感じた。

充は口惜しそうに私たちを睨むと、背中を手で押さえながら、逃げるように去っていった。

「いやあ、我が妻はやはり魅力的なんだな。あんな風に男に求愛されるとはね。だけど、次からは気をつけるんだよ」

私の肩を抱き寄せながら、常盤が満足げに言った。怒涛の展開についていけず、されるままになっていた私だったが、その一言に慌てて彼の腕の中から脱出する。

「た、助けてくれたことにはお礼を言うよ。ありがとう」

妻だのなんだのということには、もちろん納得していなかったけれど、常軌を逸した様子の充から、ひとりで逃げることはできなかったと思う。常盤の存在は、素直

にありがたかった。

「茜は愛する妻だからね。当然のことをしたまだよ」

「……………」

本当に当然のように常盤が言う。助けてもらった手前、さっきまでのように全力で彼を否定することは気が引けた。

それに、昔この場所で一緒に過ごした猫のみーくんが、私にとって心の拠りどころであり、家族であり、特別な存在だったのは事実だ。

ある意味、あの時交わした「家族になろう」という約束を、常盤は忠実に守ってくれているだけののだろう。

でも、だからといって、このまま常盤との結婚やら同棲やらを受け入れることは、もちろんできない。

「あのね、常盤」

「なんだい？　かわいい茜」

「いろいろあって疲れちゃったから、今日はひとりにしてくれないかな。これから大学に行かなきゃいけないし。だから一度帰ってもらってもいい？」

断固拒否の姿勢を取っても、のらりくらりとかわされるだけなので、もっともらし

いことを言って、とりあえずお引き取りいただく作戦に出た。

すると常盤は、緩く笑ったまま答えた。

「なんだ、そうだったのかい。それなら仕方がないね」

あっさりと私の言葉を受け入れてくれた彼に、内心ガッツポーズを取る。

——だが。

「それなら、別室でおとなしく待つことにするよ。僕が使っている部屋はどこかな？」

「は……………」

「だから言っただろう。僕たちはひとつ屋根の下で暮らさなければいけないって。だから帰ることはできない。でも茜がひとりになりたいと言うなら、僕は別の部屋にいるからね」

彼なりの譲歩だったのかもしれない。本当はもっと側にいなければならぬけれど、そういう事情なら特別に別室にしよう、とでも言いたげな、いかにも理解のある優しいような顔をして言う。

——やっぱり全然わかってない。

「あなたの使う部屋なんてないわー！」

「え？　この家は、昔見た時は茜ひとりでは使いきれないくらいの部屋数があったと

思うけど」

「部屋は余ってるけど、あんたに使わせる部屋なんてないって言ってるの！ 一旦帰れって言ってんでしょが！」

声を荒らげて言うと、常盤は楽しそうに笑った。

「新婚早々激しいね。初の夫婦喧嘩記念日と思えば悪くないな。じゃあ茜が落ち着くまで、蔵の方にいることにしよう」

いろいろな前提が間違っている上に、結局帰らないらしい。だが、もう反論する気がなかった。

同じ敷地内とはいえ、別の建物にいますというのなら良しとしようか……。あまりに話を通じなさすぎて、常盤に対するハードルが下がってきている気がする。

我ながらまずいとわかつてはいるが、精神の疲労が著しくて、頑張る気になれなかった。

「それじゃあ大学から帰ってくるのを待っているよ、茜」

「ご機嫌な様子でそう言うと、私の返事も待たずに常盤は玄関に背を向けて歩き出した。蔵の方へと向かったのだろう。」

——私に、こいつを納得させて家から追い出すことなんてできるのかな。

手強すぎる常盤に、気力を削がれた私は、残った力を振り絞って身支度を整え、現実逃避をするように大学へ向かったのだった。

* * *

大学の授業を終えた昼下がり。いつも通り路線バスに乗った私は、その振動に身を任せていた。

いつもならば、のどかな景色を眺めながらの帰り道は、安らぎを覚えるものだったけれど、今日は大層気が重かった。

帰ったらあいつがいるんだよなあ……

人の意見を全く聞かない猫のあやかしと、また不毛な言い争いをしなきゃいけないと思うと、憂鬱でしかない。

しかし、大学の授業中に冷静に考えてみたのだが、あやかしということをもとまず脇に置いておくと、常盤の主張はあながち見当違いでもないのだ。

確かに私は、十歳の時みーくんと家族になろうと約束した。心から懇願して、手作りの指輪を渡した。

その誓いを常盤は忠実に守っているだけなのだ。それも、わざわざ私が結婚できる年齢になるまで、待って。

そう考えると、一方的に約束を反故にしようとしているのは私の方である。常盤の立場になって考えると、自分の方が悪いことをしている気持ちになった。

——いや、だからって、いきなり結婚だなんて。そもそもあやかしと人間って結婚できるの？ 戸籍とかどうなるわけ？

あやかしながら、にわかには信じられない存在だ。正直私にとっても、あやかしは漫画や小説といったフィクションの中の登場人物でしかなかった。

そんな存在と、いきなり結婚だのひとつ屋根の下で暮らすだの、受け入れられるわけがないではないか。

バスから降りて、少しだけ歩き、自宅の前に辿り着く。恐る恐る木製の古びた門を開けた。いきなり常盤が「お帰り、愛する妻よ」なんて言ってお出迎えてくるんじゃないかと覚悟していたが、母屋や蔵、庭を一通り見回しても彼の姿は見当たらない。

——もしかして、帰ってくれたとか!?

いや、こつちの話を全然聞き入れてくれてなかったし、期待しない方がいいかもしれない。

暗澹たる気持ちでそんなことを考えながら、母屋の引き戸を開けて中に入った

「——!?!」

いきなり誰かに羽交い締めにされて、口を塞がれた。そして耳元で「金目の物はどこだ」と、低く囁かれる。

な、何!?! まさか強盗!?!

この近辺では、数十年間、犯罪の類はないって町会長さんが言っていたのに！今朝の充の来襲といい、なんで今日はこんな物騒な目に遭ってばっかりなの!?!

私は強盗の拘束から逃れようと思いい切り身をよじったが、やはり女の力ではびくともしなかつた。悲鳴を上げようにも、口を強く塞がれていて「んー！ んー！」というくぐもった声しか出てこない。

「大声を出すんじゃない。金の在りかだけ言え。暴れたら刺すぞ」

いつの間に取り出したのか、強盗が私の鼻先に小型のナイフをちらつかせる。

いや、ドラマとかでよくあるけど、お金を渡しても、証拠隠滅のために殺されるとか、定番だよな?!

そう考えると、この状況はもう詰んでいるのでは。

——誰か。誰か助けて！ と、常盤っ！
と、私が強く願った時だった。

急に私を押さえつける強盗の力が弱まった。かと思ったら、どすんという音が聞こえてくる。恐る恐る振り返ると、ナイフを手にした目出し帽姿の男が、床に倒れていた。それも、規則正しくお腹を上下させて。

——え、眠っているの？ なんでいきなり？

とりあえずは危機を脱したらしいことに安心しつつも、訳のわからない状況に困惑していると、静かな声が聞こえてきた。

「常盤様がおっしゃっていただけ通りだ。あなたの帰りを待っていてよかったです」

そう言いながら母屋の奥から出てきたのは、見知らぬ成人男性と、彼と手を繋いだ小学校低学年くらいの子だった。

目の細い淡白な顔立ちだが、全体のバランスはよく、いわゆる塩顔イケメンと称される顔だろう。漆黒の浴衣をさらりと纏い、髪の色は驚くことに白だ。けれど、不自然な印象はなく、色素の薄い彼にはよく似合っていた。

女の子の方は、大きな黒目がちの瞳と、小さな鼻と口をした、お人形みたいな掛け値なしの美少女だった。腰まで伸ばした細く柔らかそうな髪は、ストーンと地に引く張

られるようにまっすぐ落ちていて。茶色がかかった髪と、赤い着物のコントラストが鮮やかだ。

和服姿の、どこか神秘的な美形のふたり組。

私は一瞬で、彼らが人間ではないと察する。

「あなた方は、常盤の関係者ですか？」

とても丁寧な口調の男性に、常盤より話を通じそうな印象を持った私は、敬語で尋ねた。

彼はこくりと頷く。

「さようでございます、茜様。恐れ入りますが、私どもの説明は後ほどさせていただきますとして。危険ですので、まずは彼にお帰り願いますよう」

男性がそう言うと、床で眠っていた強盗が目覚まし、ふらふらと起き上がった。

とっさに警戒した私だったけれど、目出し帽の隙間から見えた男の瞳は、虚ろで焦点が合っていない。どうやらまだ意識はないようだった。

強盗はそのまま覚束ない足取りで歩き始め、玄関を抜け門から出て行った。

「ちよっと操らせていただきました。邪気も抜いておいたので、もうここへ来ることはないでしょう」

「へ、へえ……」

あやかしくてそんなこともできるのか。そういえばこの人、「常盤様」って言うていたけど、常盤つてもっとすごいことができるのかな？

なんて、ぼんやり考えていた。そう、ごく自然に。

短い間に、あやかしという存在やその摩訶不思議な力を、何度も見せつけられたせいでらう。私は段々と、非現実的な彼らに慣れつつあったのだ。

* * *

あの後、私は常盤の関係者らしいふたりを、あまり使っていない客間に通した。

私を強盗から救ってくれたし、物腰もとても丁寧なので、ちゃんと客人として扱わなければと思ったのだ。……誰かとは違って。

古びた座卓の上に、急須で淹れた緑茶を出すと、「茜様にこのようなお気遣いをしていただき、恐悦至極に存じます」と大層にありがたがられた。お姫様に向けられるような言葉遣いに、私の方が恐縮してしまった。

人形のような少女はお茶には無反応で、男性の着物の裾すそを握りしめている。男性の

方は、私がひと口飲んでから「どうぞ」と告げると、やっとお茶に手をつけてくれた。

そうして、一口飲んだ湯飲みを座卓に置いた彼は、きりりとした面持ちで私をまっすぐ見つめ、こう言った。

「改めまして、茜様。私は幼い頃から常盤様のお世話をしている、付き人の浅葱あさぎと申します。隣にいるのが、私の妹の伽羅きょうらです」

「常盤の付き人……」

ちらりと伽羅ちゃんに目を向けると、警戒したような目つきで私を見ていた。目が合ったのにこりと微笑んでみたが、浅葱さんの背中に隠れてしまう。どうやら人見知りをする子のようにだ。

「茜様をお守りするよう言いつかりまして、家の中でお待ちしておりました。本来なら、これは夫である常盤様の役目ですが、茜様に入ると言われたからと、代わりに私を遣わされたのです。家主の茜様の許可なく家に入るのは気が引けたのですが、危険を回避するためだったのでご容赦いただければ幸いです」

「……なるほど」

常盤は、律義にも「あなたの使う部屋なんてないわ！」って言った私の言葉を守っていたらしい。変なところで真面目な奴である。